

花 信

第1号 1997.2

Kashin: The Shinshu University Library Bulletin

目 次

時代に対応できる図書館に	1	研修報告	7
電子図書館機能の整備・充実に向けて ..	2	講演会報告	8
図書館の新しい情報提供サービス	3	業務日誌	9
利用者サービス機能を強化	4	運営委員会名簿	10
お知らせ	6	人事異動	10
分館の現況（工学部分館）	7	編集後記	10

時代に対応できる図書館に

学 長 小 川 秋 實

情報化社会となって、情報源が書籍・雑誌という紙を媒体するものに限らなくなった。各人1台といわれるパソコンを使えば、ネットワークを通して必要な情報を入手できる。出版物の内容や最新のニュースも簡単に知ることができる。このような時代に図書館の存在意義は何であろうか。書籍の保管庫だけの機能でよいわけがない。紙を媒体とする情報と電子情報のいずれをも蓄積・管理し、情報の中枢にならなければならない。

情報が溢れている時代である。その中から必要な情報を引き出すことは決して簡単ではない。印刷物であれ電子情報であれ、利用者が欲するものを素早く検索・提供できること。これが図書館の最も大きな使命である。この機能の充実を怠っては図書館の存在意義はない。世界中の図書館がネットワークで結ばれ、相互検索、資料の共同利用、海外との情報交換が可能になっている。大学間での重複を避けるべきはいうまでもない。図書館がネットワーク活用にリーダーシップをとることである。

現在、信大の図書館に所蔵されている書籍・文

献は決して満足なものではない。教官の研究分野の専門書が多く、しかも最新の刊行物の多くは各研究室に分散し、直ちに閲覧することは難しい。学生用図書は貧弱である。これからは、図書館として主体性を持って利用者の需要に応じた図書収集をすべきではないかと思う。また、分散している図書・雑誌に対しては、誰もが利用できるシステムを考えるべきであろう。

昔も今も、静かで邪魔されずに必要な文献に没頭できる環境があってこそ人は図書館に通う。教室や研究室に比べ遥かに快適な閲覧環境があることは図書館にとって大切な機能の一つである。閲覧環境の整備にも力を注ぐべきと思う。夜間・休日の開館はもちろん、24時間開館が望ましい。定員削減の折から簡単ではないが、工夫すれば実現の見込みも出てこよう。

優れた大学には優れた図書館がある。信大の図書館も教職員・学生の皆さんの協力を得て優れたものにしたい。今回発刊されることになった図書館報が、そのために媒体になることを願っている。

(おがわ あきみ)

電子図書館機能の整備・充実に向けて

附属図書館長 田 卷 義 孝

電子情報技術がめざましく進歩し、光通信ネットワークが構想され、国際標準化機構がSGML (Standard Generalized Markup Language : 文章形式について標準となるマークづけ方式) を提案している現在、大学図書館に所蔵される情報の基本単位は冊子体の出版物でなくなるように思われる。これまでは、出版物をどこに所蔵し、どうすれば利用できるかということが問題であった。これからは、コンピュータに蓄えられているさまざまな電子情報の特定の記事内容が基本単位となる。この場合、1冊の本という概念やその本の所蔵場所を示す現行の分類法などは通用なくなり、1冊ないし複数の本の中から利用者が必要とする情報を自由に取り出せるかどうかの問題となる。また、異なった観点から目的とする情報をアクセスできるように、複数の取り出し経路を用意する必要がある。近い将来に予想される本格的な“電子出版”に備えるために、著作権の保護などの問題もあるが、附属図書館としての準備を始めなければならない。

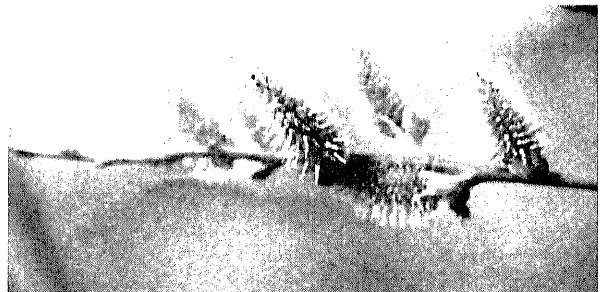
この準備の一つが、「信州大学附属図書館報」の発行である。どのような図書館サービスを提供しているか、その図書館サービスをどうすれば利用できるかといった附属図書館からの情報発信と、図書館サービスに対する注文や要望といった利用者からの情報伝達を図り、附属図書館と利用者の相互コミュニケーションを深めることができることを願っている。もちろん、このように紙に印刷した情報媒体だけでなく、附属図書館のホームページのもとに図書館サービスの提供と利用に関する「Q&Aコーナー」などを開設して、附属図書館が有効かつ適切に利用されるような運営に努めていかなければならない。

学習図書館としての機能を充実し、学生の学習活動を支援できるように努めることも附属図書館に課せられた検討課題であるが、電子図書館機能の整備・充実を目指すことが今後の基本的な課題

となる。この意味で、私が経験したことを申し述べてみたいと思う。それは、前任地での仕事の関係で教育学部で行動薬理学領域の動物実験を行い、実験結果を論文にまとめて投稿したときのことである。一人の査読者のコメントには、実験内容に関係する文献1篇を引用していないので不採用とだけ述べられていた。前任地の図書室は必要な学術雑誌をほぼ所蔵していたが、不勉強でその論文を見落としていたのである。医学部分館に通って、Index Medicusでも調べなければとウンザリしていたが、友人がコンピュータによる情報検索のことを教えてくれた。その経過には紆余曲折があったが、サーチャーに検索用語を伝え、書誌情報の出力を依頼したところ、数日を経ずして代行検索の結果が届いた。該当論文数は47件であったが、研究領域からみて自明なことであるにせよ教育学部分館の所蔵雑誌に該当するものはなかった。論文番号を手掛かりにして論文のタイトルやアブストラクトをみて必要かどうかを調べていたことに比べれば、隔世の感がした。今から15年余も前のことである。なお、実験論文は書き直して別の学術雑誌に投稿した。

コンピュータによる情報検索に関するすべての手だてを附属図書館がもっていることが私個人の希望である。動物実験を行い結果を分析し論文にまとめて投稿するときに、必要にして最新の情報を入手するための情報検索を欠かすことができないことを、自慢できないこの経験から学んだ。

(教育学部教授 たまき よしたか)



図書館の新しい情報提供サービス

— FirstSearch, Current Contents —

先日、「図書館信州」という雑誌を手にする機会がありました。この雑誌は1954年(昭和29)2月、信州大学図書館学研究会により創刊されたもので、1955年5月の4号までが当館に保管されています。この雑誌についてはいずれ紹介することとして、30ページほどの黄ばんだ誌面から、当時の図書館の話題の中心が「目録」であったことをうかがい知ることができます。

それから40余年を経た現在の大学図書館の話題の中心の1つとして、オンライン・データベースなど、ネットワークを利用した情報提供サービスが挙げられます。

図書館では、情報提供サービス拡充の一環として、今年度からオンラインデータベース検索システム“FirstSearch”の利用申請の受け付けを始めました。またCD-ROMデータベース検索システムで、新たに“Current Contents”が利用できるようになりました。これらのサービスについて、現状を紹介します。

1) “FirstSearch”

“FirstSearch”はアメリカの学術情報機関OCLCが提供するデータベース検索システムで、世界の書誌情報や記事索引、会議録などの約60のデータベースを利用できます。

昨年12月、教職員を対象に利用申請の案内をしましたが、約100名の教職員から総サーチ数7000を超える申し込みがありました。今回は、一定数検索できるカードを希望者が校費で購入できる方式になっています。これから申し込みされても受け付け可能ですので、下記の電話番号または電子メールへお問い合わせください。

2) “Current Contents”

平成8年度より稼働しましたCD-ROMデータベース検索システムは、全国で初めて“ERL”と“NetWare”という異なるシステムを同一シ

ステム上で運用したのですが、現在、図書館や学部図書室等に設置された専用パソコンのほか、クライアント・ソフトのインストールにより研究室のパソコンからも利用できます。今回、関係者のご支援によりERLシステムでISI社の提供する目次速報データベース“Current Contents”全7分野の提供を開始しました。また、ERLシステムは図書館ホームページからの検索も可能となりました。

学生の皆さんが気軽に利用できるデータベースは意外と少ないものですが、図書館内等で利用できるCD-ROMデータベース検索システムは、レポート・論文作成の情報源として活用されています。

当館では、研究者が必要とする情報を提供するために一層のサービス充実を図りつつあります。ご要望等ありましたら、ぜひお聞かせ下さい。

詳細につきましては、情報サービス課にお問い合わせください。

連絡先：内線2496または電子メール

jja0151@gipac.shinshu-u.ac.jp

(資料サービス係 田村 さおり)



利用者サービス機能を強化

—コンピュータシステムが更新されました—

1 新システム導入の経緯

平成元年2月に本学図書館が導入した図書館システム「BIBLION」は本年2月からUNIXの分散型システムである「LINUS/U」という新しいシステムに更新されました。「BIBLION」は総合情報処理センター松本地区分室に設置のメインフレームを図書館システムのホスト計算機として、中央館、各分館及び医短図書室が学内LANを経由して利用するシステムでした。図書館業務のシステム化は利用者サービスの充実と業務の省力化を主な目的としてきましたが、図書館(室)が学内7個所に分散設置されている本学の場合、ハードウェア能力の制約のためシステムの全部を動かすことができず、規模の増大に対して効果をもたらすシステム化のメリットが、他大学ほどには生じていませんでした。

今回の機器更新では、今、大学図書館に求められている学術情報流通の拠点としての機能強化、利用者サービスの強化・高度化等に的確に対応していくために、従来の延長線上でのシステム入れ替えでなく、新しい考え方に基づく分散型システムを導入することとしました。

2 新システム構築の基本方針

昨年7月、学術審議会が「大学図書館に電子図書館的機能を整備していくことが急務の課題」として建議を取りまとめています。近年、図書館は、情報の増大とマルチメディア等に代表される資料の電子化・多様化により、従来の業務に加え、それらを効率的かつ迅速に利用可能とするサービス機能の増強を要請されています。本学図書館も単に業務の効率化だけでなく、電子図書館的機能の充実・強化による利用者サービスの質と量の拡大に積極的に取り組む必要があります。これらのことからシステム化の基本目標を次の点におきました。

- (1) ネットワークを活用をして以下のサービスを可能とすること
 - ・各研究室等と図書館との双方向的通信
 - ・各研究室等からの学内外の各種電子資料・情報の利用

- ・学外からの図書館サービスの利用
- (2) すべての館(室)による全サブシステムの稼働
 - ・各館への業務用アプリケーションサーバの設置
 - ・分散処理による効率的な業務処理

3 新システムの特徴及び課題

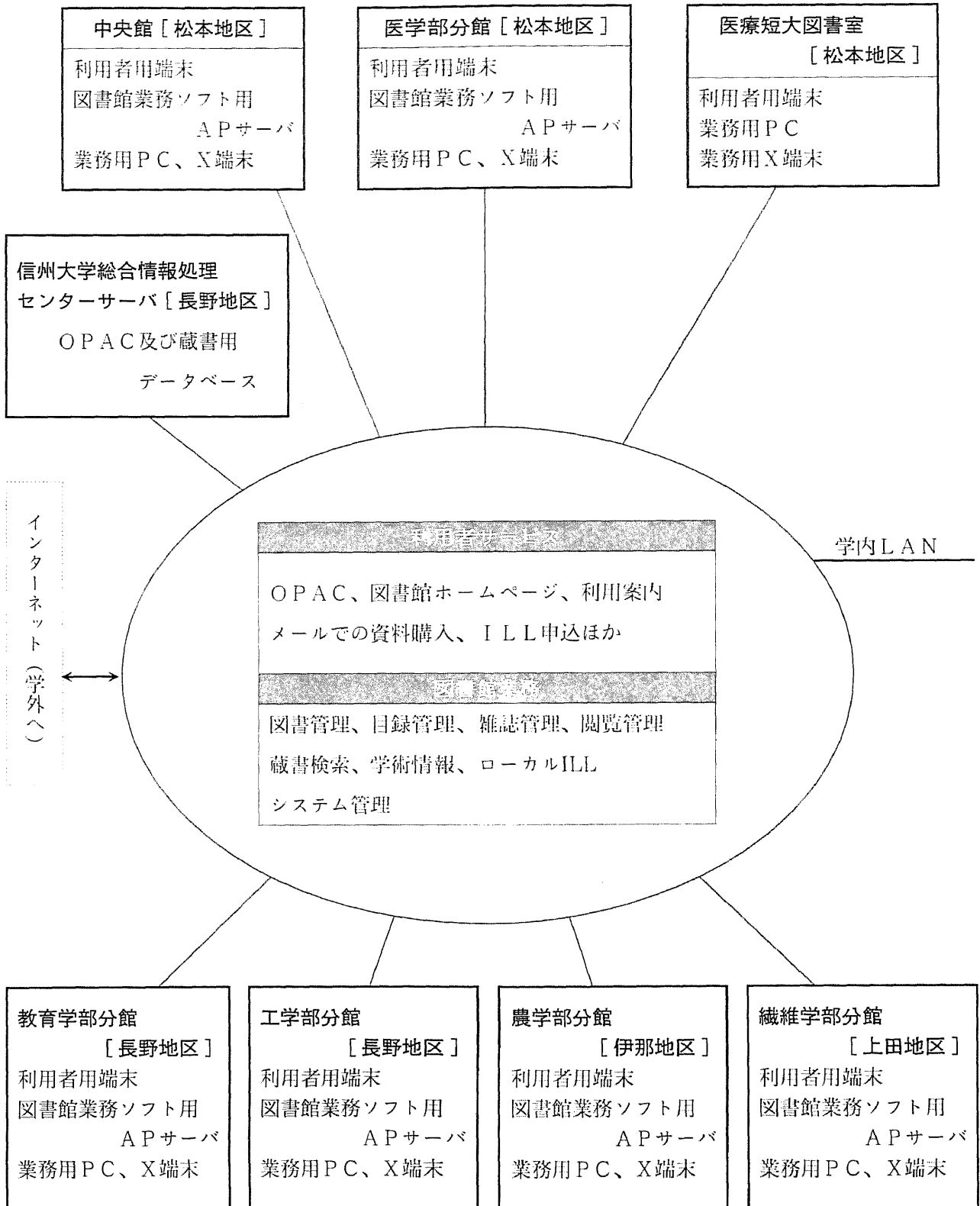
新システムは、Netscape等のWWWブラウザによってOPAC(公開利用者目録)が学内研究室等からだけでなく学外からも簡単に利用できます。さらに、研究室のパソコン等から学内LANを通じてオンラインで資料購入や文献複写の申込ができるようになります。また、従来のシステムでは不可能であった全館で全サブシステムを稼働させることから各館がそれぞれの特徴を生かしつつ、均一な利用者サービスを実施できるようになる等、本学にとっては画期的システムになっています。

しかしながら、冒頭で述べた建議で触れられている電子的情報の蓄積及び発進、例えば本学が所蔵する貴重図書や特殊コレクション等の画像データベース化、本学出版物の電子化等については、これからの課題となっています。平成7年度に導入されたCD-ROMネットワークシステムとシステムの連動も検討する必要があります。ことに現状のレンタル経費については、分散している本学の図書館においては、不十分と言わざるを得ない状況です。新システムは、本学総合情報処理センターのサーバや同システムで購入したワークステーション、パソコン等を利用することによって運用可能となっています。また、各部局からはレンタル料の不足分の負担をお願いしております。さらには、ネットワーク環境整備等については、事務局のご理解を得て進めることができました。このように今回のシステム移行は、全学からの支援により実現できたものです。電子図書館的機能を拡充するためには、今後とも予算的な裏付けは必須条件となります。

これまでご協力頂いた関係各位に対して感謝申し上げますとともに、なお一層のご理解とご支援をお願いする次第です。(学術情報係)

新図書館電子計算機システム概念図

平成9年2月1日



お知らせ

ホームページで図書の予約ができます

URL <http://shinlis2.shinshu-u.ac.jp>

図書館のホームページで公開しているOPACを利用して検索した図書が貸出中であった場合、その図書の貸出予約を画面上で行なうことができます。

また、同ホームページでは、「CD-ROMデータベース検索システム」のERLシステムのデータベースを検索できるほか、FirstSearchやCurrent Contents等の新着情報を公開しています。

〈ホームページの内容 平成9年2月13日現在〉

- ① OPAC（学内所蔵資料の目録）
- ② CD-ROMデータベース
- ③ 図書館からのお知らせ
- ④ 各館案内（中央館、教育学部分館、工学部分館、繊維学部分館）

全館で遡及入力を実施

本学では、平成元年度以降受入れた図書についてはデータベース化され、OPACによる蔵書検索が可能で、今年度からはWWW版OPACの公開も開始し、館外からの蔵書検索を実現しました。しかし、データベース化される以前の図書については、図書館に出向き、カード目録を調べるしか検索手段がありませんでした。このため昨年度から、昭和63年度以前に受け入れた図書の遡及入力事業を開始し、目録情報のデータベース化を進めてきましたが、今年度も関係各位のご援助により入力計画を推進することができることとなりまし

た。

今年度は開架図書を中心として、全館あわせて26,000冊の入力を予定しております（昨年度実績17,000冊）。さらに今年度は、特殊文庫である旧上田蚕糸学校蔵書（繊維学部所蔵）の目録入力も行ないます。この事業は、CD-ROMデータベース検索システムに続く、本学の電子図書館的機能充実計画の第2弾と位置付けられます。しかしながら、本学図書館の遡及入力済図書冊数は、全蔵書100万冊中のごく一部です。引き続き関係各位のご協力を切に願う次第です。

著作物寄贈のお願い

図書館では、本学関係者の著作物を収集するため、自著のご寄贈をお願いしております。著作物を刊行された際は、是非とも図書館にご恵贈くださるようお願いいたします。図書は、当館報で紹介

させていただきますとともに、館内に本学関係者の寄贈図書コーナーに別置き、利用の便を図ることとしております。

分館の現況 工学部分館

信州大学附属図書館報が、昭和59年3月の10号をもって休刊してから、13年の歳月が流れたわけであるが、この度の復刊に際して、先ずその間の工学部分館の変遷をざっと数字で見てみたい。

	昭和59年3月	平成8年3月
・蔵書数	96,287冊	135,960冊
・利用対象者数	2,045人（学生1,808 教職員237）	2,968人（学生2,719 教職員249）
・総雑誌所蔵種類数	1,005種	1,706種
・文献複写	1,743件（依頼882 受付861）	3,167件（依頼1,554 受付1,613）
・閲覧座席	184席	109席
・棚板延長	3,470m	3,791m
・入館者数	43,382人	49,293人
・図書館資料費	4,440万円	5,340万円

社会の変化（学問分野の学際化、国際化等）と時代の要請（インターネット時代）の中で大学もすっかり様変わりしてきたが、工学部分館に限って言えば、蔵書は増えたとはいえ学生数の伸びに追いつかず（学生1人当たり図書53.2冊-50.0冊）、増える蔵書には応急的な書架の増設で対処してきた結果、引替えに閲覧席の減少や図書館としてのゆとりの空間を失ってきた。又、資料費の伸びは主として外国雑誌や図書の高騰によるものであり、ILLネットワークの整備もあるが、外国雑誌の不足分を補完的に、大学間相互のサービス業務（文献複写）に依存せざるをえなくなっている。

資料の提供をもって教育研究を支援するという図書館の役割は昔も、今も、おそらく今後とも変わらないとしても、扱う資料や情報は質量共に増大し、多種多様になり、業務内容（運用）もコンピュータを中心に全国規模で大きな変貌をしてきた。まさに隔世の感である。

電子図書館を近未来図として描きつつ、13年間の変遷を振り返りそこを今後の出発点として考えることも決して意味のないことではないだろう。

平成8年度学術情報センターシンポジウム参加報告

97年1月23日に東京大学安田講堂に於いて開催された、平成8年度学術情報センターシンポジウムに参加したので報告する。今回のテーマは「ネットワークコンピューティングの進展と学術情報流通」と題され、具体的にはJavaに関する話題が中心であった。

各講演は大型のプロジェクターを用いて、実際にインターネットに接続したりJavaプログラムを実行させながら行われた。JavaというとWebブラウザ上で小規模なプログラムしか実行できないようなイメージがあったが、後述の新目録システムのように本格的なアプリケーションを実行する能力があり、ネットワークとの連携や開発のしやすさ等Javaの持つさまざまな利点が示された。

その一方でJavaはまだ開発中の部分が多く、どの環境でも動作するはずが実際には特定のWebブラウザでないと動作しないプログラムがあったり、日本語が使えないなど、実用的なアプリケーションを使うにはま

だ不安な部分も多いようだ。Javaの仕様は急速に進歩しており、最新バージョンでは日本語も使用可能だが、Webブラウザなどの実行環境がまだ対応していない。

講演の最後にJavaによる新目録インターフェイスの説明とデモが行われた。Javaを使用した理由は、Windowsや各種のUNIXで同じプログラムが動作し、開発やバージョン管理が楽になることが大きいそうだ。

デモが行われたのはまだ開発中のバージョンだったが、専用の端末から利用する現行の目録システムと比べて、通常のWindowsで動作するのが新鮮であった。現状でも図書を検索した際に、自館の所蔵データ等も同時に表示されるなど検索・表示機能はかなり強化されている。学術情報センターは、97年の夏頃までにはこの新目録インターフェイスを公開し、将来的には完全にこちらへ移行したい考えだそうだ。

（医療技術短期大学部図書室 上原 直行）

講演報告

電子図書館と事務情報化

去る1月30日、平成8年度第一回附属図書館講演会として奈良先端大の福富正彦学術情報課長をお迎えして、「電子図書館」と「事務情報化」の2つのテーマで講演していただきました。

最初の「電子図書館の開発について」では、文部省の支援を受けて進めている奈良先端科学技術大学院大学の電子図書館システムの開発の現状と課題について、具体的に紹介されました。

電子図書館システムは、平成8年3月末に開館及び利用者サービスを開始し、10年度末を最終目標としてシステムの整備拡張がすすめられています。

利用者は図書館のホームページにつなぐことで、資料の検索、閲覧はもとより、外部DBの検索、新着通知、図書購入依頼、文献複写依頼などのサービスを受けることができます。図書館はただ単に資料をデータベースに置き換え、利用者はそれを自分でつないで見てくださいというのではなく、すでに図書館が行っているサービスと新しいサービス(資料の電子的閲覧)を統合し、電子図書館システムとしているところにこれからの図書館の一つの在り方をみました。

(URLは<http://dlw3.aist-nara.ac.jp/>)

特に感心したのは、閲覧を目的とする画像データを、OCRソフトで(手をかけずに)、テキストデータに変換することで、全文からの検索を可能にした点です。サービスの充実と業務の省力化がうまく結びついていると感じました。

ネックは著作権です。奈良先端大でも、著作権を得るための理解を求めるのにたいそう苦労されているとのこと。また、著作権許諾資料の公開が学内利用に限定されているため、全文の閲覧は学内者の利用にとどまっています。これは各図書館で資料を電子化し、閲覧サービスを行っていく場合に必ず生じる問題で、個別に許諾をとるのか、グループでとるのか等がこれからの大きな課題でしょう。

奈良先端大では、①ネットワーク環境が整備さ

れ、教職員学生一人一台のネットワーク対応端末がある、②サービス対象者が大学院生以上のため、収集する資料が比較的限定される、③情報科学研究科という専門知識を有する教員スタッフの全面的なバックアップが得られる、といった電子図書館システム導入をはかりやすい要因があります。信大とはかなり状況が異なるので、奈良先端大のような電子図書館システムを直ちに構築するのは無理ですが、例えば、新着通知や、購入依頼、文献複写依頼はすぐにでもできるし(現在LINUS/Uシステムで準備中)、資料のDB化についてもジャーナルやアブストラクトなら早々に対応できるのではないのでしょうか。

次に「事務情報化」についてお話いただきました。事務情報の共有化と流通化を目指し、学生、教官とも情報交換が可能なシステムにするため、適切な機密保護も行う一方、ユーザーインターフェイスをホームページとすることにより、機種の違いを克服でき、また、日常業務をこなす上でわかりやすいシステムを構築し、現在、一部運用中とのことです。

信大のようにキャンパスが分散化している組織では、このようなシステムが実現されれば、連絡が密にとれ、一体感も生まれるのではないかと思います。こちらの講演には事務局の方も多く参加され関心の高さがうかがわれました。

最後に、これらのシステムの中心となってたいへんお忙しいところ、しかも大雪の中、松本まで講演にきてくださった福富課長にあらためてお礼申し上げたいと思います。

(教育学情報係 押見 智美)



業務日誌

(8.4.1~)

平成8年

- 4月25-26日 第47回北信越地区国立大学図書館協議会(信州大/館長外)
- 5月7日 附属図書館運営委員会(平成8年度第1回)
全学図書館関係係長会議
- 11日 事務部制発足
- 21-22日 第67回日本医学図書館協会総会(神戸/医学情報係:淵井)
- 28日 平成8年度国立大学附属図書館事務部課長会議
(東京医歯大/部長、管理課長、サービス課長)
- 30日 国立大学図書館協議会理事会(東大/部長、サービス課長)
- 31日 大学図書館に関するヒアリング(文部省/部長、管理課長、サービス課長)
第1回NACSIS-IR講習会(学術情報センター/資料サービス係:田村)
- 6月11-13日 学術情報センター目録システム地域講習会(金沢大学/織維学情報係:米田)
- 13日 全学図書館関係係長会議
- 7月2-3日 第2回NACSIS-ILLシステム講習会(学術情報センター/教育学情報係:丸山)
- 3-4日 第43回国立大学図書館協議会総会(横浜/館長、部長、サービス課長)
- 9-11日 第2回目録システム講習会(図書コース)
(学術情報センター/医学情報係:春原、農学情報係:清水)
- 16日 第3回NACSIS-IR講習会(学術情報センター/教育学情報係:丸山)
- 7月15-
- 8月2日 平成8年度大学図書館職員長期研修(筑波、東京/図書情報係:石坂)
- 23-24日 第3回NACSIS-ILLシステム講習会(学術情報センター/医学情報係:渡邊)
- 24日 附属図書館運営委員会(平成8年度第2回)
- 8月7-9日 第3回医学図書館員基礎研修会(自治医科大/医学情報係:上條)
- 9月19日 附属図書館運営委員会(平成8年度第3回SUNS使用)
附属図書館収書委員会(平成8年度第1回 ")
- 10月8日 全学図書館関係係長会議
- 22日 第4回NACSIS-IR講習会(学術情報センター/教育学情報係:犬浦)
- 24日 第2回電子メールシステム講習会(学術情報センター/医学情報係:渡邊)
- 11月7-8日 平成8年度北信越地区国立大学附属図書館事務(部・課)長会議
(新潟大/部長、サービス課長)
- 7日 第17回北信越地区医学図書館協議会(金沢市/医学情報係:小林)
- 12日 CD-ROMネットワークシステム講演会(SUNS使用)
- 13日 附属図書館運営委員会(平成8年度第4回 SUNS使用)
- 18-21日 平成8年度大学図書館職員講習会(東大/教育学情報係:押見、倉田)
- 27-28日 第9回国立大学図書館協議会シンポジウム(名古屋大/篠田専門員)
- 28-29日 平成8年度北信越地区国立大学図書館研修会
(富山医薬大/雑誌情報係:杉本、教育学情報係:犬浦
農学情報係:野口、医短図書室:上原)
- 12月3日 平成8年度信州大学附属図書館初任者研修(中央館)
- 11日 附属図書館運営委員会(平成8年度第5回 SUNS使用)
- 17-19日 第5回目録システム講習会(図書コース)(学術情報センター/教育学情報係:倉田)

平成9年

- 1月23日 平成8年度国立大学附属図書館事務部課長会議(金沢市/部長)
平成8年度学術情報センターシンポジウム(東大/医短図書室:上原)
- 30日 平成8年度第一回附属図書館講演会(旭会館)
講師:奈良先端科学技術大学院大学研究協力部 福富正彦学術情報課長
- 2月21日 平成8年度第二回附属図書館講演会(SUNS使用)
講師:学術情報センター事業部 笹川郁夫目録情報課長
学術情報センター新目録所在サービス甲信越地区説明会(旭会館)

附属図書館運営委員会名簿

(平成8年12月16日現在)

附属図書館	館長	○ 田 卷 義 孝 水 野 知 昭 数 土 直 紀	工 学 部	分館長	○ 小 沼 義 治 酒 井 雄 二
人文学部	教授	○ 横 田 通 宏 山 下 宏 之	農 学 部	分館長	○ 太 田 克 明 森 本 尚 武
教育学部	分館長	○ 舟 岡 史 雄 山 本 宣 之	織 維 学 部	分館長	中 沢 賢 進 ○ 成 田 進 進
経済学部	教授	○ 井 上 和 行 竹 下 徹	事 務 局	事務局長	渡 部 翁
理学部	教授	○ 寺 脇 良 郎 福 嶋 義 光	オブサーバー 医療短大	教授	水 野 清 志
医学部	分館長				

○印は収書委員

人 事 異 動 平成8年5月11日～

8. 5. 11	事 務 部 長 情 報 管 理 課 長 情 報 サ ー ビ ス 課 長	大 浪 由 紀 夫 青 木 道 雄 濱 崎 修 一	(事務局付) (事務局付) (事務局付)
8. 5. 24	辞 職	降 幡 敦 子	(総務係)
8. 6. 17	総 務 係	有 坂 里 佳	(採用)
8. 7. 1	図 書 館 専 門 員 農 学 情 報 係 長 雑 誌 情 報 係 教 育 学 情 報 係 医 学 情 報 係 松本附属学校第2係主任 織 維 学 情 報 係 医 療 短 大 図 書 室	篠 田 修 修 伊 藤 光 博 手 塚 久 盛 押 見 智 美 春 原 幸 江 佐 藤 陽 子 鳴 澤 直 子 上 原 直 行	(農学情報係長) (医療短大図書室) (教育学情報係) (織維学情報係) (図書情報係) (医学情報係主任) (学術情報センター) (図書情報係)
8. 7. 31	任 期 満 了	平 山 祐 次	(館長)
8. 8. 1	館 長	田 卷 義 孝	(教育学部分館長)
8. 12. 27	辞 職	藤 原 純 子	(図書情報係)
8. 12. 31	辞 職	平 林 道 子	(医学情報係主任)

(注) 事務部制移行に伴う係名変更による異動は除く。()内は旧職名等

編 集 後 記

信州大学附属図書館報「花信」をお届けします。
昭和59年3月第10号を最後に本学図書館報は休刊
しておりましたので、13年振りの復刊ということ
になります。

そして、新たに「花信」というタイトルを冠す
ことになりました。花信とは、花のたより、花
が咲いたという意味ですが、信州からの花のたよ
りを全国にお知らせしたいというスタッフの期待
もこめられています。

末長く、どうぞよろしくお願い致します。

花 信 第 1 号 1997年2月28日

本文中の写真は田村利裕氏(駒ヶ根市)提供

■ 編集・発行 信州大学附属図書館

〒390 松本市旭3-1-1

TEL 0263 (37) 2174・FAX 0263 (33) 5833